

張愛玲における時代と文学

——1950年代の短編小説から——

Literature and the Age for Eileen Chang

——Short Novels written in 1950s——

池上 貞子*

Sadako Ikegami

はじめに

1940年代半ば、その特異な作品世界とライフ・スタイルとで、日本占領下の上海でしばらく時の人であった女性作家張愛玲（1920～ ）は、中華人民共和国成立後しばらくして香港に出、のちにアメリカに渡った。いわゆる人民文学を主流とした解放後の中国の文学史書の中なかでは抹殺されてきたに等しいが、80年代に入り、さまざまな分野での開放政策の表われとして過去の見直しが行なわれるなかで、彼女の文学も掘り起しがなされつつある。しかし、彼女の経歴とか、旧著を含めた著作の出版が主として台湾の一出版社に委ねられている事情などからして、当然台湾圏での研究の方が盛んであることが考えられる。筆者はこの度機会を得て台湾へ行き、研究者に会ったり、書店や国立図書館で資料を収集したりした。

膨大な資料の山を前に痛感したことは、まず「張愛玲研究の系譜」ともいうべきものの作成の必要なことだ。本人およびかなりの数の研究者がアメリカに在住しているうえに、香港からも台湾からも論評している。それらの多くは台湾で出版される。そして最近は大陸でも散発的に、思いがけない所で論文が発表されている。

*一般教育等

それぞれの研究者は研究者としての資質や個性のほかにそれぞれの経歴を抱えていて、観点は時を超え、空間を超えて錯綜する。こうした状況を今、即座に日本人の立場から系譜化することは、筆者にとっては至難のわざに近く、これからの課題として時間をかけて取り組んでいくしかないように思う。

資料を概観して、もう一つ興味深いことは、作品集の出版が大まかに言えば過去に溯る形でなされていることだ。つまり、少なからずの作品について研究や論評の方が先行し、やむなく過去の亡霊を引っぱり出さざるをえなくなっているのである。このことは先に述べた研究の系譜にも関連があると思われ、論評が論評を呼んで、主人公（作者および作品）のいない舞台が展開されたフシもある。こうした状況のもつ重みが本人に与える痛みや想いを致さないわけではないが、研究する側からすれば、不明確であったある時代の張愛玲の生活や文学の背景が明らかにされることであり、意味のあることと言わざるをえない。

筆者は先ごろ、1944年前後の、すなわち日本占領下の上海という空間と日本敗戦直前という時代における張愛玲を、胡蘭成という人物との係わりを通して、日本の側から探る作業を試み

表1 皇冠叢書の張愛玲著書一覧表

書名	出版年月	内容	備考
秧歌	1968年7月	小説	1954年、雑誌『今日世界』（香港）に連載。同年、単行本およびその英語版あり。
流言	1968年7月	エッセイ集	もと上海街燈書報社版。1945年1月各種の雑誌登載のもの。
怨女	1968年7月 ※	小説	1966年、香港の新聞『星島晚報』に連載されたもの。内容は「半生縁」（十八春）と酷似。
張愛玲小説集	1968年7月	小説集	もと『伝奇』として、1944年4月、上海雑誌社から出版。その後、再版多し。
半生縁	1969年3月	小説	もと『十八春』として、上海『亦報』に連載。1948年。筆名、梁京を使用。同社より単行本あり。「半生縁」は原文の最後の3章を欠く。
張看	1976年5月	小説、エッセイ	処女作「天才夢」（1939）から渡米後のエッセイまで。唐文標の論評に促された。◎
紅樓夢魘	1977年8月	「紅樓夢」注	
惘然記	1983年6月	小説、映画シナリオ	1944年の作品も含む。1950年代中心。80年代になって加筆のものあり。アメリカの研究者の発掘が先んじる。◎
海上花	1983年11月	「海上花」注訳	原文は蘇州語。
餘韻	1978年5月	小説、エッセイ、中篇小説「小艾」を含む。	出版社編集部への代序あり。海外図書館での研究者による発掘に触発されている。1944、5年のエッセイから「小艾」（1948 or 9）まで。◎
続集	1988年2月	小説（英文も）、シナリオ、エッセイ	1952年上海を離れて後、各地で発表し、単行本に入っていないもの。発掘者との紛糾を避けるためという主旨の自序あり。◎

(注) 1. 出版年月は皇冠叢書での初版を示す。

2. ※は、筆者手持ちの第18版（1987年4月）によれば、初版は1966年4月とあるが、叢書番号などからして、表記のとおりと考えられる。

た⁽¹⁾。本論ではこれと底流として直結する1950年代前半のいくつかの短篇小説を取りあげて、彼女の文学と時代との係わりを考えてみようと思う。これら一連の作業は、一個の人間または女性としての張愛玲にとってはいささか迷惑な部分もあるかもしれないが、作家としてのありようと私生活とは別と考える彼女のこと、これくらいのことで動じることはあるまい。後述するように、過去の作品に手を加えつつも公表し、またその周辺の事情を本人がわずかながら語っているという、筆者言うところの「過去

に溯る出版」そのものが、それを物語っているように思う。

I. 張愛玲にとっての1950年代前半

台湾における張愛玲自身の著作の出版を一覧表にすると、表1のようになる。出版社は皇冠出版社で、すべて皇冠叢書に入っている。備考欄に付した◎印によって、まえがきで述べた特殊な出版事情が推察されると思う。

本稿ではこのうちの『惘然記』に収められている「色、戒」、「浮花浪蕊」、「相見歡」を取り

あげる。これらが書かれた（後に何度も手が加わっているようなので、厳密に言えば、構想ができた）1950年代の張愛玲の代表作としては「秧歌」と「赤地之恋」があるのだが、反共思想とからめた別の問題があるため、ここでは深く論じない。ここではむしろ、しばしば取り沙汰されるこの二本の大樹の下草にあたる短編に焦点をあて、人と文学と時代の係わりあいについて考えてみたい。

1950年代前半は、張愛玲にとって目まぐるしい変化のあった年月であった。1952年に大陸から香港へ出、55年秋には香港からアメリカへと渡っている。いったい中国の文化界では、日本が敗戦して撤退した後、国民党と共産党の力関係が定まらないなかでも、日本に協力的なまたは抵抗しなかった一部の文化人は、“文化漢奸”として自己の民族から激しい指弾を受けた。そのレッテルだけは逃れた張愛玲のような作家たちも、日本占領下で活躍したことはマイナスに働き、従来どおりの形の文学活動は不可能であったらしい。彼女の場合も、既出書の再版などはなされていたが、主に映画のシナリオなどを書いてきたようだ⁽²⁾。そして共産党政権の樹立という方向が見えてくると、作品の中でそれを受け入れようと試みたことが、たとえば中篇小説「十八春」（のちに「半生縁」と改める）や「小艾」などの例にうかがえる⁽³⁾。

だが、「共産党がやってきたばかりの頃は、小市民たちはその手ごわさに気がつかなかったが、2、3年すると、分ってきた。自己の運命を他人の手に委ねたのち、首ねっこを押さえられ、じたばたして、やけになっている」⁽⁴⁾という状況判断などがあって、1952年上海で開かれた第一次文学芸術界代表大会に出席をしたものの、その年のうちに香港に出る。

香港ではアメリカの“新聞処”（インフォメーション・サービス）に勤め、1954年にはそこで発行している中国語の宣伝雑誌『今日世界』に「秧歌」と「赤地之恋」を連載する。ちなみに1971年にカリフォルニア州バークレー

で、人を避けて暮らしている張愛玲との会見に成功した水晶（台湾出身の作家・研究者。1969年ごろからアメリカに滞在）の報告によれば、「赤地之恋」は“授権”（commissioned）の状況下で書いたと本人自ら語ったと言う⁽⁵⁾。任務として指示されたということだろうか。

いずれにせよ事情が事情であるため、その年のうちに単行本にまとめられ、英語版も出版された。アメリカ在住の研究者夏志清によれば、1955年春にアメリカでも出版されている。夏氏は「秧歌」を「中国小説史上不朽の名作」であるとし、張愛玲を高く評価して⁽⁶⁾、その後の張愛玲研究の口火を切った観があるのだが、そのことはまた機を改めて論じたい。張愛玲自身は1955年秋にアメリカに渡り、しばらく東海岸で創作修行をするうちに結婚もし、のちに西海岸に移って、バークレーにあるカリフォルニア大学中国研究センターで働く傍ら、翻訳も含む文筆活動を続けている。

ところで本論で取りあげる3篇の小説は、作者自ら「3篇とも1950年代に書いた」⁽⁷⁾と言ひ、とくに「色、戒」は1953年に構想を練りはじめたことが知られるので⁽⁸⁾、だいたい香港にいた頃すなわち「秧歌」や「赤地之恋」を書いていた頃と重なるのではないかと思われる。ただし、今回参考にした『惘然記』所収のものは、かなり手が加わっているようだ⁽⁹⁾。つまり30年に及ぶアメリカでの生活体験を経た、80年代の今の感覚で整理されているということだ。かつて「低気圧の時代」に、「水や土壌のすこぶる悪い場所」で「文芸の園に奇花異卉が頭を出した」⁽¹⁰⁾とされた彼女が、異なる時と場所でのどのように小説世界を構造していくのか、すなわち何をどう書くのかということに興味をもつ筆者には、その生々しさや息吹きが消え失せないまでも弱まっているであろうことを残念に思う。しかし、作者が同じひとつの作品としている限り、作品のテーマは不変であろうし、本稿の意図するところ——人と文学と時代の係わりあいを考察するうえで、何らさしつかえな

いものと考える。

II. 「色、戒」「相見歡」「浮花浪蕊」

3つの作品の内容の時代については、「色、戒」は1943,4年ごろ、「相見歡」は1946,7年ごろと考えられる。「浮花浪蕊」は場面設定は1950年代初だが、「意識の流れ」により1945年前後も時代背景に入る。今、この内容の時代順にあらすじを紹介し、検討を加えてみる。ただし「相見歡」については、日本撤退後の社会相や戦時生活の人々に与えた影響をよく映しているが、本稿の当面の関心とはズレがあるので、あらすじを紹介するのにとどめる。

「色、戒」

——日本占領下の上海、日本の傀儡政権である汪兆銘の南京政府の特務、易氏の家では、易夫人の仲間の夫人たちが寄り集まって、いつものように暇つぶしのマージャンにふけている。ただしそのうちの一人、王佳芝は易夫人お気に入りの、香港からきた高級担ぎ屋だ。

そこへ帰宅した易氏が、他の人に悟られぬように王に合図を送る。実は王は易氏の秘密の愛人なのであり、今から外で会おうというわけだ。ところが王の本当の姿は愛国学生で、広州の大学で学んでいたが、戦火を避け、大学に従って香港に来たあと、演劇の仲間たちと謀って売国奴たちを倒すことにする。その標的が易氏だった。一人の男子学生がブローカーになりすまし、王はその妻というふれこみで、易夫人に近づく。やがて易氏は、重慶から脱出して香港で政府樹立の機をうかがっていた汪兆銘と話しあいがつき、南京政府樹立とともに上海へ来る。王も易夫人の気に入るような品を携えて上海に現われ、易家に身を寄せている。

この日、王は興奮して緊張気味だ。易氏を暗殺する計画になっているのである。約束の喫茶店でさんざん待たされたあげく、ようやく現われた易氏をインド人の経営する怪しげな宝飾店に誘い込む。口実にしたイヤリングの修理を頼

んだあと、易氏の方から言い出して、高価なダイヤを買ったりする。王は外で待ちかまえている仲間の動きと時間の按配を考えて、緊張の連続だ。だがとつぜん王の心の中に「この人は本当に自分を愛しているのだ」という想いが浮かび、呆然となる。そして一言、「早く行って」と、彼にささやいてしまう。易氏はその一言ですべてを、すなわち自分の身に迫った危険と彼女の正体を悟り、一人脱兎のごとく飛び出していく。危険を脱した易氏は即座に電話一本でその付近一帯を封鎖させ、容疑者は夜の10時にもならぬうちに全員銃殺させる。一方、彼のあとから宝飾店を出、ひとり人力車に乗った王は間もなく封鎖に遇っており、彼女もこの銃殺された中に入っていることが暗示される。

易家では、王の出ていったあと替わりの人が入って、女たちのマージャンはあいかわらず続いている。帰宅した易氏と何も知らない夫人たちは、誰が食事をごちそうするかという、易氏と王が出ていくまえに皆で交していた応酬を、辛辣な他人の噂話にからめながらくり返すのだった——

この作品の収められている『惘然記』の序にあたる文章の中に、以下のようにくだりがある。

この3つの小物語は（本稿で取りあげている「相見歡」「色、戒」「浮花浪蕊」を指す——引用者）かつて私に衝撃を与えた。それゆえこんなに長い時間の間に、幾度となく書き改めた。思いをめぐらしても、はじめて材料を得た時の驚き喜びと書き改める過程に思い至るだけで、少しもこの三十年の時が過ぎ去ったように感じられないくらいだ。愛とは価値のある無しを問わないものである。これもまた「此の情 追憶を成すを待つ可けんや／只だ是れ 当時 已に惘然」⁽¹¹⁾というところ。それゆえ作品集をまとめるにあたり『惘然記』と名づけた。

これにより、本論で取りあげた3篇には、人なり出来事なり、とにかくモデルがあったことが推察できる。そのことへの作者の想い入れそのものを書名にするほど、強いインパクトをもっていたということだ。

ところで「色、戒」の主要モチーフ「汪政府の特務が愛人を装った愛国青年（主観的な場合も含めて）に手引きされて暗殺されかかるが、辛くも脱し、かえって彼女を死に至らしめる」という話は、汪政権樹立後、上海で起こった有名な事件を彷彿させる。それは、汪政府の特務機関（住所にちなんで「76号」と呼ばれていた）のボスであった小男の丁黙邨と日中混血の女学生にまつわる話だ⁽¹²⁾。ちなみに陳舜臣も、現代史の中の日本と中国との係わりに焦点をあてて、この事件を織り込んだ実録風の短篇小説を書いている⁽¹³⁾。

事実としては、陳舜臣の小説などもそうになっているが、特務暗殺失敗の原因は丁黙邨自身の用心深さにあるようなのだが、張愛玲の作品でははっきり主人公の女性が男を逃がしたことにしている。そして易氏——この憎むべき売国奴・特務に対して哀れみや愛情すら感じている……ここに中国人の批評家たちは極度の反感を覚えるらしい。先に表で示した張愛玲の作品集の中で一番最近の『続集』には、「羊毛出在羊身上——談『色、戒』」（「羊の毛は羊の身体に生える——『色、戒』について」）と題する一文があって、その辺の事情の一端がうかがえる。批評文自体を目にしていなかったので彼女の反論から推量するに、「女主人公の愛国の動機が不明である」とされたり、性や愛に微妙に揺れ動く女主人公の心理に対し、愛国学生らしくないという不満が出されたりしたのではないかと考えられる。そして漢奸（売国奴）を批判しているのか、讚美しているのか判断に苦しむ、ということらしい。

だが、言うなれば、もともとそうしたステレオ・タイプ化になじまないのが張愛玲の文学の本質なのである。代表作の『伝奇』も『流言』

その他の言文も、そして何より彼女自身の生き方がそれを示している。それが人間である限り、たといどんな身分や立場や外貌をもとうと、様々の心理をもちうるし、行動をしよう。悪役だから悪いことしか考えないし、やらないとは限らないのだ。張愛玲文学の代表的な研究者である唐文標を焦立たせた彼女の反道徳的な姿勢は、ここにも貫かれている。

そしてまた、その頃の彼女の私生活では、汪政府中の人物であった胡蘭成との関係を見落すわけにはいかない。これについては筆者はすでに論述している⁽¹⁴⁾のでここではくり返さないが、歴史のダイナミズムの中で結果的にどういう結末および評価を得たにしろ、その時において、当事者すなわち彼女にとってそれは真実であり、現実であった。彼女自身、胡蘭成との関係について自分が悪い人間で悪いことをしている、という意識はなかったと思う。漢奸そしてその周辺にいる者を一律にすべて否とするなら、脈うつ生の流れの中で、心や感情をもってその時々々の営みを続ける人間にとって、生か死か、二つに一つしかなくなってしまう。人間とは人生とはもっと複雑なものだ。彼女の文学は自らの生き方をも組みこんで、そう主張するように思われる。その他もちろん張愛玲に政治的な活動歴はなかったろうが、太平洋戦争勃発によって学業が中断された女子学生の形象化には、自らのその体験にかなりこだわっていた彼女自身の姿が投影されていよう。

「相見歡」

——日本が撤退した1、2年後、上海のある金持ちの家で、2人の女が戦時を経て久しぶりに会い、おしゃべりを始める。家の主伍夫人のところでは、4、5人いる子供たちの1人を除いてみなアメリカに留学しており、残ったその娘は夫がやはりアメリカに留学してしまったので、母の元に帰ってきている。伍氏は実業家で、共産党騒ぎで会社と一緒に香港へ移ったまま帰らず、金は送ってくるが、行った先で女も

子供もできて、帰る様子はない。

客の荀夫人は抗日戦争中、南京博物館職員の夫が重慶に行っている間、3人の子供を連れて北京にある夫の実家に身を寄せていた。この度、荀氏が上海の大学図書館に職が見つかり、やっと一家が上海で一緒になれたというわけだ。上の2人の子供は北京の学校の寮に入っていて、考え方など世代のギャップが出はじめていることがうかがえる。

旧交を復活した2人はそれからというものしょっちゅう同じ場所でおしゃべりをし、時折荀氏も顔を見せるが、いつも疲れ切っている。伍夫人が若い頃夫に従っていったアメリカで料理ができずに苦労した話から、子供や親族の話、今日の世相のことなどとりとめもなくおしゃべりを続けるが、荀夫人には生活の貧しさ、伍夫人には帰らぬ夫のことなどそれぞれが自分の悩みにとじこもりがちで、話がいつも過去のこと、同じ話のくり返しになっているのにも気がつかなくなる——

「浮花浪蕊」

——場面は香港から日本へ向かうノルウェーの貨物船の上。時期は日本で「アメリカの占領軍がもうすぐ撤退しようとしている」頃、すなわち1950年代のはじめと思われる。戦時中、イギリス系の会社で働いていた洛貞は、共産主義政権の生まれつつある上海で仕事も見つからず、姉や姉の知人の縁故をたどって大陸を脱出。しばらく香港で働いたあと、昔の学友を頼って日本へ行こうと、今この船上の人となっている。船の中でのふとした出来事に、来し方の様々の思い出がよみがえる。

船の客は、彼女のほかに英印混血の男とその日本人の妻しかいない。日本人妻は彼女にアルバムを見せたりして親しくなろうとつとめるが、洛貞のはっきりしない態度に、結局気まぎらくなってしまふ。やがて船はどこかの小島に立ち寄り、戦争で男がいなくなったせい、荷作業のために日本人の女の一人が現われる。それ

らを見、また船上の夫婦のあり方を目にし、洛貞は日本人というものについて考え、また自らの漂泊の身を想うのだった——

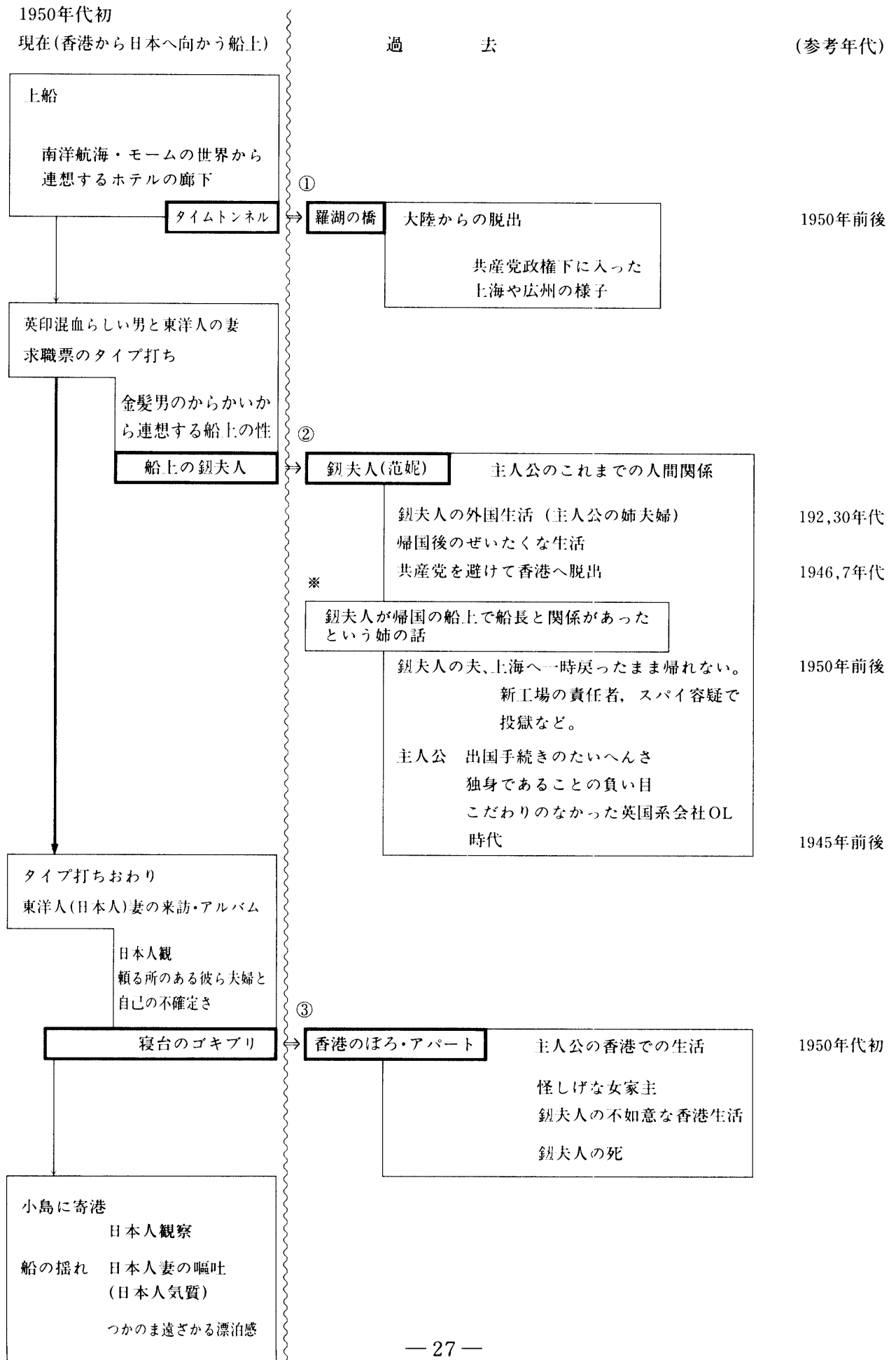
この作品について、作者自身は『惘然記』の序の中で、「最後に大々的に書き改めた際、社会小説の方法を参考に用いてみた。題材が近代の短篇小説に比べて散漫であり、ひとつの実験だ」と述べている。ここで言及している近代の短篇小説というのは、他の情況から考えて、サマーセット・モームの「雨」を示すものと思われる⁽¹⁵⁾。社会小説の方法というのは具体的なところは分らないし、前述したように作品の原案もしくは原文が見られないので断定しにくい。一つには以前に比べ、かなり社会的な視点が見られることはあげられる。時代と主人公をはじめとする人物との係わりが、言辞の上でもかなり明確に表現されているように思われる。

もう一つ、方法的に新しいこと、ここで言えば「意識の流れ」の手法を試みたらしいことがうかがわれる。作者自ら「題材が散漫」と言っているが、いくつかの場面が錯綜しているので、理解の助けとして図1のように図表化してみた。

図の作成者である筆者が明確な方法論ももたずに速成したので、厳密さに欠けるかもしれないが、場面展開の道筋はたどれると思う。当然これらの場面展開にコメントや作者の感慨のようなものが加わるので、作品世界はもっとふくらんだものになっている。

しかし、作者自身の言うように散漫な感じは免れない。技法的なことで言うなら、船の上という場面とそこに流れる時間とを現在として、時折過去への追想があるわけだが、スムーズに読者を誘いこめない部分も見られるのだ。大きく分けて三回ある過去への逆流の導入は、図1の①で上船後の安堵感と航海への緊張感とに触発されてタイムトンネルを滑り戻り、それが大陸と香港を結ぶ羅湖の有蓋の橋に形象化されていくのは自然であるし、③の、船室のゴキブリ

図1 「浮花浪蕊」に見る意識の流れ



から家具もろくにない住居の香港のぼろアパートへと移行していく過程にも無理はない。しかし、最も重要な船上の人に至るまでの主人公の運命に係わりのあった釧民夫婦や姉夫婦、上海（すなわち共産党政権下に入り始めた頃の中国）、香港などといった過去への導入部分には問題がある。主人公に「キスしようか」などと軽口をたたくノルウェー人の水夫から北欧の性の自由を連想した上で、「彼女はわれ知らず釧夫人（范妮）の、あの時の船の上でのことを思い浮かべた」という一文を過去への入り口としており、船（および二次的なものとして性の暗示）が重要なキーワードでありながら、一足飛びに范妮の派手な留学生活や帰国後の生活の話になってしまい、これを受けとめるものがなかなか出てこないのだ。おそらく図1の※に示したように、主人公の姉が、釧夫人本人が香港へ去ってしまって差し障りがなくなってから、「范妮はあの時、帰国する船の中でね、夫婦で船長と一緒にテーブルで食事をしたの。その夜、范妮は船長の部屋に行ったのよ」という言葉を受けるのだろうと思う。

この処理の技法上の巧拙について筆者には断言しかねるが、少なくとも様々のエピソードが氾濫する中で、4ページも5ページにもわたって宙吊りにされるのは、読む側にかかなりの負担をかけることになる。もちろん読む側の中国語の能力の問題もあるが、話の跡をたどりにくいことは確かだ。

ところで何度もくり返すとおり、80年代の書きかえがどの程度のものであるかは分らないが、盛りこまれたエピソードのかなりの部分は最初からあったのではないかと思う。何しろ「はじめて材料を得た時驚喜したのであった」し、またそれゆえにこそ結果的に「題材が散漫になった」ものであろうから。船旅および日本人の描写は、香港大学の学生だった彼女が香港陥落のため、学業半ばにして上海へ戻る時の体験がベースになっていると思う。その際船上から望んだ台湾の美しさから日本に想いを致して

いるし、また航海中に日本人水夫からかれの娘たちの写真を見せられたりしたらしい⁽¹⁶⁾。日本人妻の形象は上海虹口の日本租界での見聞や胡蘭成を通じて得た知識、そしてある部分はアメリカ西海岸で暮らす間に得た日本人妻の印象が投影されているかもしれない。ちなみに日本人および日本人妻については、かなり早く40年代に見解を示している。以下は彼女の親友であるセイロン人のファティマとの対談に見られる言葉だ。

F：日本人の個性には一種の完璧さ——うんざりするほどの完璧さがある。外国人に嫁した日本女性は半生の西洋生活に全く同化してしまったように見える。ところが夫が死ぬと、子供を連れてやはり日本へ帰り、たちまちまた徹底した日本人に変わってしまう。おじぎ、微笑、言葉使いなど……（略）

張：なぜか知らないが、日本人は故郷から隔絶されると、全くだめだ。アメリカの日系人のようにアメリカで生まれた人たちは非常に軽妙できれいで、日本くささがすっかりぬけている。かれらのうちに立派な人は少なく、私はああいう人たちを好きになれない。中国人のように、欧化はしていてもやっぱり中国人で、よいのもいれば悪いのもいる、という風ではない。日本人は半分半分ということができないのだ。

F：……白人の思想は直線、中国人の思想は曲折した短い直線。白人は厳しくロジックに合わせるが、中国人のロジックはしょっちゅう変転して、かなりフレキシブルだ。だが、日本人の思想方式は変わっている。つまり二本の平行する破線なのだ。左に少し、右に少し、それからまた左に少し右に少しと書いて、そのまま推し進めていく……⁽¹⁷⁾

張愛玲の日本および日本人観については、い

ずれ稿を改めて考えたいと思っている。とにかくこの作品に盛られているエピソードの数々、大陸脱出の過程、香港での生活などは、すべてが作者の体験とは言わないまでも周辺の出来事などであって、彼女にとっての真実なのだと思う。共産党政権になってしばらくしてからの、「自分の運命を他人の手中に委ねたあと、首ねっこを押さえられて、ジタバタし、破れかぶれになっている」という心持ち。「自分たちの代が一番いくじがない。古いものは軽視するくせに、新しいことはできない」という思い。出国申請をした後、家に調査にきた警官との虚々実々のやりとり、カーテンもないハードシートの寝台車で広州へ向かう時の暗たんたる緊張、国境の橋を渡りおえたとたん荷物運びの老人と息切れするまで走り続けたときの緊迫感、それに続く解放感……これらは体験者のみが知っている感覚ではないだろうか。作者は自分の人生行程のひだに埋まっていたこれらを、陽の当たる場所に並べ直しているかのようだ。

筆者は、意余ってやや過剰気味の感もあるこうしたエピソードの羅列に、「色、戒」での漢奸の扱い方に共通するところの、作者の自分の人生に対する自己肯定を感じる。それらは記録であり、作者が現在に至るまでの過程の、証の一部分である。それからもう一つ、紹介というニュアンスがある。作者の体験が稀有であればあるほど、語り披露しようという気持ちが働くであろう。ましてや常に外国人を意識しなければならぬ境遇にあれば、なおのことではないだろうか。エピソードを一つでもよけいに紹介して、相手の理解に寄与しようとするのだ。

記録と紹介、これらは創作の時期を問わずつねに拡張的だ。短篇小説の中でそれを生かすために、「意識の流れ」は確かに有効な手法だったのかもしれない。それゆえにこそ、いっそうの周到さが要求されると思うのである。

むすび

張愛玲はかつて、「一般に〈時代の記念碑〉

と呼ばれるような作品は、自分には書けないし、書いてみようとも思わない」と言った⁽¹⁸⁾。だが、敵国占領下の上海という時代が、時代を書かない時代であったと考えるなら、彼女はある意味で時代を忠実に写していたと言える。当時の上海に暮らしていたことのある、ある中国文学研究者が筆者に語ったところによれば、「張愛玲の奇抜な服装を、自分たちは一種の抵抗の形と見ていた」そうであるし、また「反日運動の一つの形として、煩雑なまでに日常生活の細々したことばかりを書いている作家のグループもあった」ということだ。

この度、筆者が台湾で会ったあるフェミニズム活動家兼中国文学研究者の女性は、現代中国文学史の中で代表的な女性作家を並べてあげ、こう語った。「蕭紅⁽¹⁹⁾(1911～1942)や丁玲⁽²⁰⁾(1904～1986)も張愛玲と文学や生き方の上で共通するところのある作家だが、蕭紅は愛情の犠牲になり、丁玲は理想主義に走り、張愛玲は…」と言葉を探してから、「複雑だ」と言った。それは文脈から、「したたかだ」とも「現実主義者だ」ともとれる言い方だった。拙稿では、限られた時代の張愛玲とその文学との係わりの検討を試みたわけであるが、彼女が決して単なる恋愛小説専門の閨秀作家ではないことが明らかになったと思う。

論述を進める過程で、各作品がそれぞれ抱えている問題に引きずりこまれ、一つの作品を深く検討する方法をとるべきではなかったかと迷わないこともなかったが、度々くり返すように文学者とその時代との係わりを考えるとという観点からは、このような粗雑なアプローチも一つの方法として許されるのではないかと自己弁護している。日本、中国大陸、台湾そしてアメリカ、香港の相互の関係も変化しており、張愛玲に関する資料も増えている今、過去の人であった彼女は現在に近づきつつある。そして筆者自身は日本からの距離を的確に測る方法を模索しつづけているのだ。

注

- (1) 「張愛玲と胡蘭成——“漢奸”をめぐる」20世紀文学研究会編『文学空間』Ⅱ—9, 1989年7月, p.75
- (2) 張愛玲が1945年以後映画にたずさわったり, 1952年に開かれた第一次文学芸術界代表大会に出席した背景には, 上海文芸界の指導者の一人夏衍の力添えがあったようだ。(柯靈「遥寄張愛玲」雑誌『聯合文学』29期, 1987年3月, p.90~91, 台北)
- (3) 拙稿「張愛玲と『伝奇』——中国と西洋の接点」『共栄学園短期大学研究紀要第4号』, 1988年, p.28~29
- (4) 張愛玲「浮花浪蕊」『惘然記』皇冠出版社, 台北, 1983年6月, p.53
- (5) 水晶「蟬——夜訪張愛玲」『張愛玲的小説芸術』大地出版社, 台北, 1973年9月, p.27
- (6) 夏志清「張愛玲の短篇小説」「評〈秧歌〉」『愛情・社会・小説』純文学出版社, 台北, 1970年9月, p.31~77
- (7) 張愛玲『惘然記』序, 注(4)参照, p.8
- (8) 張愛玲『続集』序, 皇冠出版社, 台北, 1988年2月, p.9
- (9) 注(7)参照
- (10) 迅雨「論張愛玲の小説」唐文標『張愛玲雜碎』聯経出版, 台北, 1978年7月, 付録 p.115
- (11) 晩唐の詩人李商隱(812~858)の詩「錦瑟」の中の句. 意味は, 「この悲しみ, 朦朧としてとらえがたい思いは, こうして追憶する今はじめてそうなったものなのか. いや, そうではない. あのころ, 愛の日々において, すでに私の心は見定めがたく朦朧とした現実のなかにおかれていたのだったから」前野直彬監修 市川桃子 斎藤茂著『中国古典詩聚花 詠史と詠物』小学館, 1984年12月, p.266~267
- (12) パンリン著, 毛里和子・毛里興三郎訳『オールド・シャンハイ——暗黒街の帝王』東方書店, 東京, 1987年12月, p.182~183. 犬養健『揚子江は今も流れている』中公新書, 1984年2月, p.235~257(もと文藝春秋刊1960年9月)
- (13) 陳舜臣「七十六号の男」『陳舜臣全集第23巻』講談社, 1988年3月, p.177~
- (14) 注(1)参照
- (15) 注(4)参照 p.48
- (16) 張愛玲「双声」『餘韻』皇冠出版社, 台北, 1987年5月, p.63
- (17) 同上, p.65~66
- (18) 張愛玲「自己的文章」『流言』皇冠出版社, 1968年7月, p.22
- (19) 蕭紅: 中国東北生まれの作家. 抗日と病苦と恋愛にもまれながら, 各地を転々とし, 鋭い感性と人間愛に満ちあふれた作品を生み出した. 代表作に「生死場」(1935年)や「呼蘭河伝」(1941年)などがある.
- (20) 丁玲: 湖南省生まれ. 職業婦人だった母の影響で独立心に富み, 左翼文芸運動などに参加. 1931, 2年ごろ共産党に入党. その後国民党側に捕えられたり, 共産党支配区で文化工作に従事したりした. 解放後は要職に就くが, 57年に右派とされ, 79年の名誉回復まで農場や監獄で過ごす. 代表作は初期の「莎菲女士的日記」(1928年), 「我在霞村的時候」(1940年). 長篇「太陽照在桑乾河上」(1948年)は, 1951年度スターリン賞を受賞した.